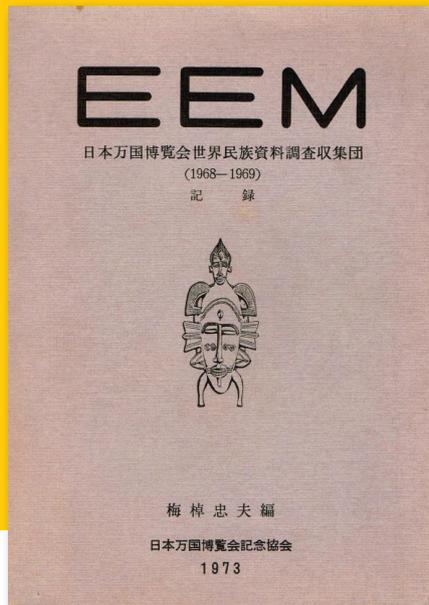


令和2年度（2020年度）秋季特別展

# 万国博覧会



“人類の進歩と調和”に至るまで

会期

令和2年10月3日(土)～  
11月29日(日)

梅棹忠夫が編集した日本万国博覧会世界民族資料調査収集団 (EEM) 記録の表紙 (1973年)

1970年の大阪万博から50年、その節目の年を記念して秋季特別展を企画しました。題して「万国博覧会——“人類の進歩と調和”に至るまで」です。「人類の進歩と調和」は周知のように大阪万博のテーマです。万博会場の跡地にはいまでも進歩橋と調和橋が残っています。万国博覧会がテーマを掲げるようになったのは1933年のシカゴ万博からですが、テーマに沿って万博を統一的に企画・立案するようになったのは1958年のブリュッセル万博以降です。

本展示は、国際博覧会の歴史のなかで「テーマ以前」と「テーマ以後」を比較・対照するとともに、特定のテーマが生まれる時代背景にも注意を喚起しようとしています。とくに「人類の進歩と調和」については政府とは別の「万国博を考える会」の自発的活動を深く掘り下げています。

本展示をとおして2025年の大阪・関西万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」についても歴史的に考える機会になることを願ってやみません。

(特別館長 中牧弘允)

# ウルトラマンと怪獣と万博テーマ

## はじめに

初期のウルトラマンは、分かりやすい勧善懲悪の物語ではなく、いろいろと考えさせられる作品や、ときに後味の悪いと感じる作品さえある。正義と悪の二項対立ではなく、戦中の人間の愚行や戦後のパラダイムシフトの経験の上に立って、同時代における経済成長とそれに伴う社会の歪み、すなわち公害や差別などの社会問題を怪獣という形で表現し、視聴者によりよい社会のあり方を問いかけていたのではなかろうか。ゆえに怪獣は、必ずしも悪として表現されなかった。もしかしたら、「正義」の対義語は「正義」なのではないか、と社会に対して問うていたのかもしれない。そしてこのことは、日本万国博覧会(1970年大阪万博)のテーマである「人類の進歩と調和」の「調和」の思想とも通底するように思えてならないのである。

## 初代ウルトラマンと古代怪獣ゴモラ

初代ウルトラマンは、1966年7月から1967年4月まで、TBS系列で毎週日曜に放送された、TBS・円谷プロダクション制作の特撮テレビドラマである。全39話が放送された作品のうち、第26話「怪獣殿下(前篇):古代怪獣ゴモラ登場」(1967年1月8日放映)と第27話「怪獣殿下(後篇):古代怪獣ゴモラ登場」(1967年1月15日放映)は、当時3年後に1970年大阪万博の開催を控えた大阪でロケが行われた。ストーリーは、阪神大学の生物学者・中谷教授率いる学術調査隊が、ジョンソン島で1億5,000万年前の恐竜ゴモラザウルスの生き残りである古代怪獣ゴモラを生け捕りにしたところから始まる。そしてそのニュースは瞬く間に全世界を駆け巡り、世界中の生物学者を驚かせた。この生け捕りは、1970年大阪万博の古代館でゴモラを生態展示するためだという。科学特捜隊がUNG麻醉弾で眠らせた身長40メートル、体重2万トンの巨大怪獣は、ジョンソン島から大阪まで空輸される途中で予定より早く麻醉が切れ、上空で暴れ始める。やむなくワイヤーが切断され、高度2,000メートルから落下するのだが、これがなんと、死なないのだ。死なないどころか、むしろパワーアップして暴れまわる。事ここに至って中谷教授は、「万国

博は剥製で我慢する。お願いします」と、科学特捜隊や自衛隊伊丹基地の部隊の隊員にゴモラの殺害を要請する。しかしゴモラは、モグラのように地底に潜って進み、千里丘陵や大阪城などで飛び出してはさらに暴れ回るのである。

余談だが、こうした状況下で大阪府一帯の住民には避難が呼びかけられる。そのときの登場人物のやり取りがなかなか興味深い。緊急避難命令が発令された大阪の住宅団地で、慌てて避難の準備をする妻が夫に対して、「あなた、早く逃げる用意をしてください」と言うと、夫は釣り道具をいじりながら落ち着いた様子で、「どこへ出るか分からないものを、どこへ逃げたって無駄でしょ」と返す。妻が「団地の下にいるのかも分からないんですよ」と言うと、再び「いないかも知れないじゃない」と返す。なんだか、コロナ禍の現代社会を連想するやり取りで、ニヤリとしてしまうのだが、実はこれにはオチがある。ようやく落ち着いた妻と夫が部屋でおにぎりを食べ始めたところに、小学生の息子が「おにぎりの匂いを嗅ぎつけて、怪獣が出るよ」と言って、両親を脅かすのである。



図1. 現在の大阪市中央公会堂  
(2002年に国の重要文化財に指定)

さて、1918年完成の大阪市中央公会堂など大阪市中心部をズタズタに破壊した後、ゴモラは再び地中に潜った。レーダーでゴモラが1931年に完成した鉄筋鉄骨コンクリート造の大阪城方面に向かっていることを知った生物学者・中谷教授は科学特捜隊日本支部ムラマツ班隊長に対して、「大阪城は大阪市民の、いや日本人の大切な遺産の一つだ。絶対にゴモラの

破壊から守らねばならん」と訴える。このほかにも、ラジオではアナウンサーが「500年の伝統ある我が城も、遂にゴモラの手によって破壊されるのでしょうか」と伏線を張り、さらにムラマツから戦闘中のハヤタ隊員に対して、「3度目の正直。今度こそゴモラを叩き潰すんだ。ゴモラを運んだのは我々だ。科学特捜隊の名誉挽回のためにも、ゴモラから大阪城を守ってくれ」と身勝手な連絡が入る。しかし、彼らの願いも虚しく、ゴモラは先の中央公会堂だけでなく、無残にも大阪城を派手に破壊してしまうのだ。暴れ回った末にゴモラは、ウルトラマンに倒される。大阪城のシーンの最後にアラシ隊員とイデ隊員がこんなことを言う。アラシ隊員が「とうとう死んだか。憎むべきヤツだったが、かわいそうなことをした」と言うと、それに続けてイデ隊員が、「剥製にして、万国博の古代館で飾ってやろう。大阪城は500年だが、ゴモラは1億5,000万年前の遺産だからなあ」という。一件落着というにはあまりに虚しい。



図2. 現在の大阪城天守閣（1997年に国の登録有形文化財に登録）

人間が最初から手を出していなければ、ゴモラは無人島であるジョンソン島で人間に危害を加えることのない古代生物として生息していただろう。その意味で、本篇は人間の愚行を見事に表現した作品といえるし、また1970年大阪万博のテーマ「人類の進歩と調和」のうち、「調和」とも通底する思想が見え

隠れする作品ともいえる。「明日は今日より、よりよい日になる」と信じて疑わなかった高度経済成長期の日本で、初代ウルトラマンのような作品が誕生し得たのは、戦中の人間の愚行と戦後のパラダイムシフトを経験し、経済成長の歪みを目撃してきた当時の関係者、特に脚本担当の一人で、沖縄出身者として沖縄戦やアメリカ統治、さらに本土の人々からの差別を経験した「戦後世代」ともいえる金城哲夫（1938-1976）の、場合によっては無意識の主張が反映されていたからかもしれない。軍国主義教育の後に平気で戦後民主主義教育を教え込もうとする教師に象徴される大人への不信感や、同時代の公害や差別などの社会問題への疑問が生じていた世代特有の世界観がそこにあったとしても不思議ではない。制作者はそこに絶対正義や絶対悪は存在させず、むしろ視聴者一人一人に問いかけ、考えさせる作品に仕上げたかったのではなかろうか。

### 万博と万博テーマの近現代史

さて、ここからは万博や万博テーマの歴史を振り返りたい。

1970年大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」であった。このテーマは、主に民族学者・文明学者の梅棹忠夫、SF作家の小松左京、社会学者の加藤秀俊らを中心とした「万国博を考える会」のメンバーによって起草された基本理念を元に作られたものである。「万博」と「進歩」という2つの言葉は、1851年に始まる万博の科学技術・産業・貿易振興の歴史から考えても親和性が高い。しかし、「万博」と「調和」という2つの言葉は、歴史的に見ると決してそりが合う言葉ではなかった。そこに考える会のメンバーが、世界中の文明が理解と寛容の精神を持つことで多元的に共存し、多様性の中の調和にこそ進歩が果たされるべきだと説き、東洋思想の和の心をもって東西を結びつけることの必要性を主張したことで、テーマに正義と悪の二項対立としての勧善懲悪的発想ではなく、東洋思想に根ざした「調和」という言葉が採用されることになったと考えられる。「調和」やそれに類似した表現や思想が万博のテーマとして意義あるものと考えられるようになるのは、1958年のブリュッセル万博以降である。それ以前の万博ではテーマが重要な役割を果たすことはなかった。

まず、万博でテーマが設定されたのは、シカゴ

市制施行100周年を記念した1933年シカゴ万博が初めてであった。シカゴの100年が産業革命以後の近代化100年と重なることから、「進歩の1世紀/A Century of Progress」がテーマとして設定されたのである。しかし、テーマの必要性が切実ではなかったこと、またテーマの背後にそれを支える基本理念が確立されていなかったことなどにより、1933年シカゴ万博では、テーマは十分な役割を果たすことができなかった(1)。

第二次世界大戦後、商品の見本市的な側面としての万博の優位性の低下や戦争や公害問題等の存在の顕在化等により、テーマが実質的な意味を持ち始める(1)。第二次世界大戦後初めての大規模な万

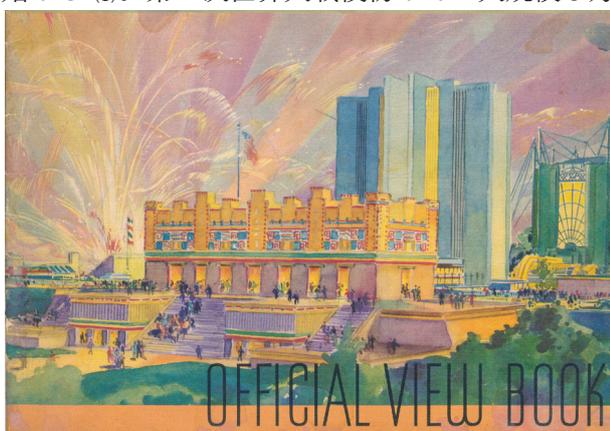


図3. 1933年シカゴ万博の公式冊子

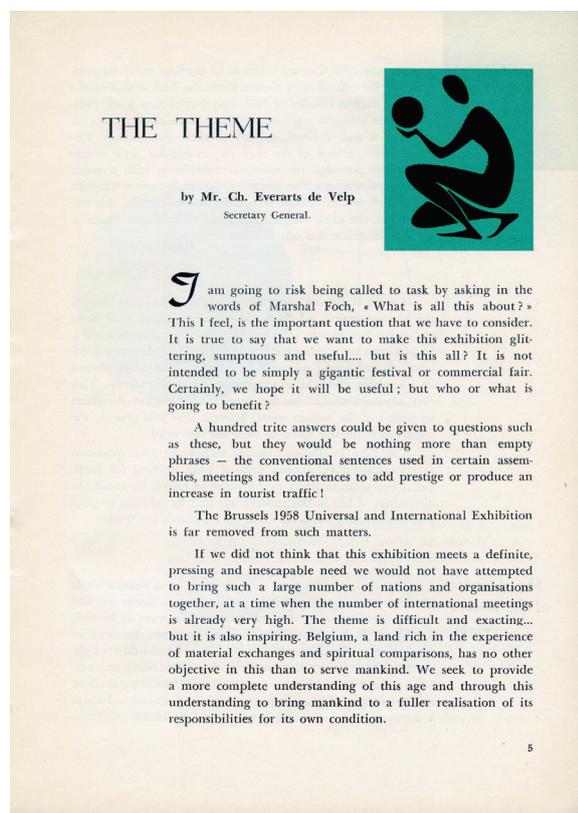


図4. ヴェルプによる『ブリュッセル1958年のテーマ』(1956年)

博である1958年ブリュッセル万博ではテーマを「科学文明とヒューマニズム/A World View: A New Humanism」とした。戦争や核の脅威等に対する危機感をもとに問題意識を打ち出したこの万博は、その後の万博のテーマ設定に重要な影響を与えた(2)。そして、このテーマ設定には、ブリュッセル万博協会の事務総長であったエヴェラルツ・ド・ヴェルプが重要な役割を果たした。ヴェルプは、「顕著な新事実」や「未来」だけでなく、「多様性」やさらに「危険性」をも提示しようとした。万博のあり方のこうした転換は、人類の多様性が認められつつあった時代ならではの相互尊重への方向性であり、様々な地球規模の危機を経験し、また新たな危機に直面する時代ならではの方向性でもあった(2)という意味で、万博史上極めて重要な出来事であったといえる。それまでの万博が追い求めていた短期的な科学技術礼賛の方向性から、万博をむしろ長期的な、より上位概念としての「人類」や「地球」のあり方を考える機会にするという方向性へと変化させ、そうした中でテーマの重要性が次第に増していった(2)。この流れが1970年大阪万博でも引き継がれ、「進歩」のみならず「調和」をも重視する万博が形作られていったのである。

しかし一方で、ブリュッセル万博に関して忘れてはならない負の出来事がある。この万博は、ベルギーが植民地支配をしていたベルギー領コンゴの人々を見世物的に「展示」し、来場者がコンゴの人々を動物扱いするよう仕向けた「人間動物園」だとして、批判を浴びたことでも知られているのである。ベルギーが植民地支配する地域の人々をベルギーに連れてくるという非主体的実態によって行われたベルギー領コンゴの展示は、アフリカをはじめとする多くの植民地が独立を果たす1960年代を迎える直前の時代における、「多様性」に対する欧米諸国の考え方の限界を象徴的に示すものであり、このことは、「人間性の再生」を提唱したヴェルプの理念とも明らかに矛盾する行為であった(3)。

アフリカをはじめとする多くの植民地が独立を果たした1960年代以降に開催された1967年モントリオール万博や1970年大阪万博においては、独立を果たした各国が万博という舞台に主体的に参加できるようになり、参加国数はこの辺りから急増していったのである。

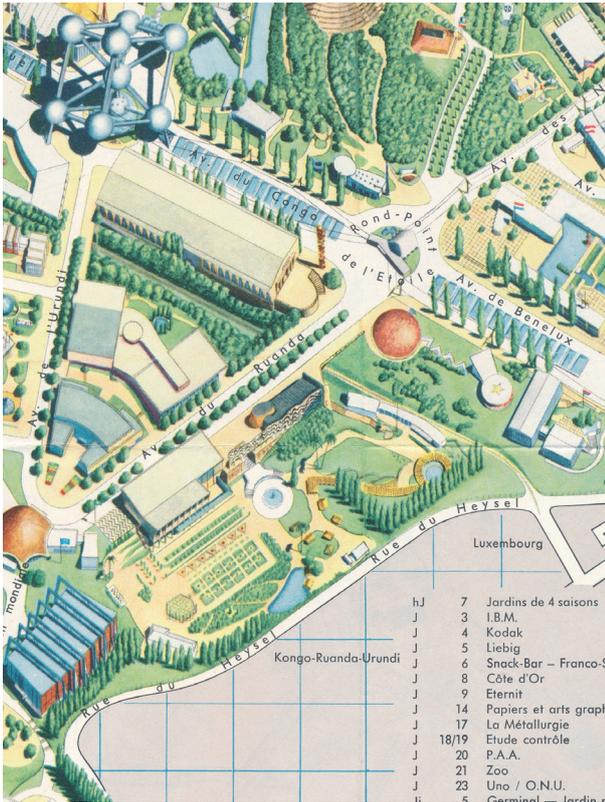


図5. 1958年ブリュッセル万博の3Dマップ  
(部分=ベルギー領コンゴ及びルアンダ=ウルンディ区域)



図7. 1958年ブリュッセル万博の絵はがき

### おわりに

以上、世界史の中における戦争、核、公害および生身の人間の歴史と、それに影響を受けた万博テーマの歴史の延長線上に1970年大阪万博の「人類の進歩と調和」というテーマが設定されたこと、また特撮テレビドラマである初代ウルトラマンの思想と、1970年大阪万博のテーマに至る万博の歴史が共に抱える、人間の慢心や愚かさ、そしてそれらに対する批判的思考について紹介した。皆さんは、こうした過去の経験に根ざした映像表現や万博と人間の歴史に対して、どのような現代的まなざしを向けるだろうか。

### 引用文献

1. 平野暁臣編『20世紀が夢見た21世紀——大阪万博』(小学館クリエイティブ、2014年)p.177。
2. 五月女賢司「1970年大阪万博の基本理念——『万国博を考える会』による草案作成の背景と経緯」(『万博学——万国博覧会という、世界を把握する方法』、2020年)p.248。
3. 五月女賢司「1970年大阪万博の基本理念——『万国博を考える会』による草案作成の背景と経緯」(『万博学——万国博覧会という、世界を把握する方法』、2020年)p.249。

(当館学芸員 五月女賢司)



図6. コンゴ人少女のパスポート(1958年)



令和2年(2020年)8月19日、国立民族学博物館の第3代館長をされました、石毛直道先生に、1970年の大阪万博の思い出を中心にお話をお伺いしました。



#### 石毛直道(いしげ なおみち)

京都大学文学部史学科卒業。京都大学大学院文学研究科修士課程中退。農学博士。

京都大学人文科学研究所助手、甲南大学文学部助教授、国立民族学博物館教授等を経て同館第3代館長。国立民族学博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。

世界の食文化に精通する、民族学、食文化研究の第一人者。

**中牧：**1965年に大阪万博の開催が決まりました。関西では、小松左京さん、梅棹忠夫先生、加藤秀俊先生などを中心に、「万国博を考える会」が立ち上がりました。石毛先生は小松先生、梅棹先生、加藤先生らとは大変親しくしておられましたので、そういう議論に加わったことはございますか。

**石毛：**そうですね。1964年に「万国博を考える会」というのが出来て1年たってから、私が京都大学の人文科学研究所で梅棹忠夫助教授の助手になったわけです。考える会の中で中心的な人物だったのは小松左京さんなんです。小松さん、加藤秀俊さん、梅棹忠夫さん、あるいはのちに桑原武夫さんも加わるんですが、そんな人たちが人文科学研究所にいた。そう

すると小松さんは、「考える会」の中心人物だったし、しょっちゅう人文科学研究所へ来て、相談するわけです。

わたしはそのころ人文科学研究所で助手の部屋が足りなくて、梅棹助教授と同じ研究室に入っていた。そこへ小松さんが来ては話をするので私はメンバーではなかったけど、いろいろ話を聞いたり、それから小松さんと個人的に親しくなって、小松さんが帰るとき、その辺で一杯やろうか！てな話になったりしてたんです。

**中牧：**様々な用事で小松先生も来られてたんでしょけど、万国博を考えるということが中心的な話題だったんでしょか？

**石毛：**万博の理念だとかを考えることをやっていた。その考える会ができて1年くらい後かな、日本で万博をやるとということが正式に決定した。そうすると万博の公的な組織ができて、万博の理念はどうしたらいいかななどを相談に came ました。70年万博の開催の理念などは「考える会」が実質的には作ったようなものです。

**中牧：**格調の高い理念を掲げてますね。

**石毛：**それがどれだけ実現できたかっていうことはまた別の話。

**中牧：**「人類の進歩と調和」という基本理念は考える会で練られたわけですけど、あの当時メンバーの方は若かった。意気軒高で議論も弾んだと思いますけれど。

**石毛：**まあ万博を考えるということのを口実に、みんなと会ってディスカッションを楽しんでいた感じです。



**中牧：**石毛先生は、太陽の塔の地下空間で展示する仮面や神像を収集する、日本万国博覧

会世界民族資料調査収集団の団員として民族資料を集められたわけですが、何点くらい集められたんですか？

**石毛：**点数は忘れましたが何百点か。私が担当した太平洋と東南アジアのものを集める費用と収集品を送るお金が200万円しかない。ずいぶん、苦労したんですが。一番大変なのは送る船賃。万博の開催が日にちが決まってるから、それを展示に使うには早く送らなきゃならない。でも太平洋のちっちゃな島に行ってたから、そこから直行の船便なんかないわね。そこで色んな商社の現地駐在員の人にしたのむ。現地駐在員の方は、群島の中心の島にしかいない。はずれの島で集めた物を、何とかその人の所に送ると、その人が日本への船便を手配してくれる。それも安く乗せてくれる。他には、パプアニューギニアの仮面や神像は、その当時は世界でも有名になり始めていたので、現地のパプアニューギニアの首都であるポートモレスビーへ行ったら、日本の10分の1の値段で売っている。しかしそれはポートモレスビーの骨董屋みたいな美術商の所で、そこからまた100kmぐらい離れた所へ行って、作ってる村へ行くとその10分の1の値段で入手できた。

**中牧：**100分の1になる。

**石毛：**作ってる所ばかり行って、物を集めた。ほんとに、あの安い収集費でずいぶんと。

**中牧：**出来上がった太陽の塔の地下展示をご覧になってどんな印象を持たれましたか？

**石毛：**プロデューサーの岡本さんは、よそよそしくガラスケース越しに見るんじゃない、いざとなったら触ることもできるよう露出展示をした。そうすると、地下の空間の薄暗いところに、色んな神様の像だとか、仮面があってそういったのは迫力があって、ガラス越しに見る美術品として鑑賞するんじゃなく、向き合いながら直に迫力がある、伝えられる、おもしろい展示だったと思います。

**中牧：**展示自体のお手伝いをしたことはないんですか？

**石毛：**それはないんですが、展示の実際の仕事は、小松さんが指導者になって、地下の空間を。そうするとですね、小松さんから1日に2回も3回も電話があつてね。それで、あれはどっちが表なのか、裏なのか、現地ではどうやって使うのかなどを聞かれました。

**中牧：**収集にかかわったということで、万博の開催中、自由に、フリーで入ることができたとお伺いしましたけど。

**石毛：**わたしはフリーパスを持ってるから、それを持って裏の事務所の所から入ることができた。当時私は京都に住んでたんですが、週末は必ず万博の開催中はずっと見に来ていた。だから万博のパビリオンをすべて見ました。

**中牧：**全部踏破した！特に印象に残っているパビリオンというのはございますか。

**石毛：**そうですね、まあともかく、たくさんあつて。どれがって言われるとまあなんとも。ただですね、やっぱり自分がまだ行ったことのない国、例えばクウェート館とかキューバのパビリオンとかそういったところを、わりと時間をかけてみましたね。



**中牧：**次はあの収集した資料が民博に移管されたことについてお話を伺いたと思います。

**石毛：**前から日本民族学会が、日本にも民族学の博物館を作ろうじゃないかっていう動きがあつて泉さん（泉靖一・東大教授）、梅棹さんはその発起人みたいな。ですからその仮面と神像を世界から万博のために集める、それだけじゃなくて将来の民族学の博物館ができたときに資料になるなんてこと考えてた。それで、ちょうど収集団が結成されたころ、4年に1度ある世界民族学人類学会という国際

会議を日本で開催することになって。

**中牧**：1968年ですね。

**石毛**：晩餐会に岡本太郎さんが参加して、フランス語でものすごく力強い演説をしたんです。「この万国博のために、日本の若い人類学者たちが世界中から仮面と神像を集める。集めに行く若いフィールドワーカーが、あなたの国へ行ったら協力してくれ」と。そして「集めたものは万博だけではなくて、将来考える国立の民族学博物館の基礎資料になるだろう。」まあ岡本さんはフランスが長い人ですから。フランス語がすばらしいだけではなくて、ものすごく力強いですね。

**中牧**：爆発的な力を発したんですか。

**石毛**：人々の心を揺さぶるような声で大演説。



**中牧**：いよいよ5年後大阪で再び大阪・関西万博が開催されるわけですが、それに向けて何か期待とかございますか。

**石毛**：70年万博のテーマが「人類の進歩と調和」だった。果たして、70年万博はうまく実現したのか。といいますのは、「進歩」ではいろいろなパビリオンが、特に企業が主催するパビリオンがでた。しかし、「調和」や「人類」についてはできたか。各国がいろいろなパビリオンを出して、自分の国がいかにか素晴らしいかと強調する、ナショナリズムが大変きついものだったわけです。人類全体について考える、そういったパビリオンがほとんどなかった。どうも私の見た限りでは、あまり実現されてなかったと思う。それで今度の万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。これは人類全体の問題として、命や人類のことをもっと前の

万博に比べたら取り扱ってもらえると思う。命というと、体をいかに健康に保つか、医学だとか健康だとかに集中してしまいがちだが、命を支えるのは身体力だとか、生命力だけじゃなくて、心の問題があると思う。心が豊かで、いろんな環境、変化にもちゃんと対応していく。そういった心の問題、心の健康というもの取り上げてもらいたい。それこそ、これから人類に必要なことじゃないかな。本来は、宗教が心の問題を扱ってきたけど、世界的に宗教はどんどん力を失ってきている。未来社会を考えたときに、宗教の力を借りずに豊かな心を保つことによって命は輝くのだから、その心の問題を今度の万博で考えてもらいたいと思います。

**中牧**：楽しみに5年後を期待したいと思います。万博の未来に対する提言もいただきまして、大変ありがとうございました。



※今回掲載の特別館長インタビューは、秋季特別展のオンライン講演会として動画の公開も予定しています。是非ご覧ください。

吹田市立博物館だより 第83号 令和2年(2020年)9月20日発行

編集・発行/吹田市立博物館

〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL 06(6338)5500 FAX 06(6338)9886 ホームページ <http://www2.suita.ed.jp/hak/>

この冊子は3,000部作成し、1部あたりの単価は23円です。